



私が小さかった頃、今頃は素足に竹の下駄が心地よかった。長屋の軒下には朝顔が高く伸びて打ち水とともに清々しい風が渡っていった。そろそろ風鈴売りが軽やかな賑わいの音と共にやってくる時期だ。このごろはあわただしさに流されて、つい朝顔の種を撒く時期が遅れ、まだひよろつとしたままだ。浅草の朝顔市を見て、今年も又出遅れてしまったと毎年思っている。

あの頃はこんなコンピュータなどと言うものを紙とペンのように使うなどとは思ってもみなかった。家の前のくずやの親子は毎日一生懸命汗を流し、となりの床屋のお兄さんは穏やかに笑っていたし、鳥居の前には時折猿回しの猿が金の帽子をかぶって踊り、紙芝居はにぎやかに拍子木を鳴らした。子供たちはめんこやペーゴまを握りしめ、瓶の王冠を胸に飾り、鼻の下をピカピカ光らせて笑っていた。よそのうちにある金属の黒い扇風機がものめずらしく、筆筒の上のラジオの雑音の中から聞こえる物語に聞き耳をたてながら、買いに行かされた一貫目の水を目打ちで砕いていた。水道も井戸もなかったから毎日もらい水、水は甕からひしゃくで飲むものであった。夜は屋台のラーメン屋のラッパの音を聞きながら、寝付くまで母がうちわで静かにあおいでくれた。

静かな時がゆっくり流れていた。そして今、私は何をしているんだろう。少しは進歩しているのだろうか、考えてしまう。たくさんめまぐるしい年月が過ぎ去って、子供の頃は考えてもみなかった驚きの道具たちに囲まれて、コンピューターの光の幕に、次々と文字や、図形を浮かび上げさせ、仮想の世界を築きつつあるのに、果たしてそれだけの幸せが訪れたのであろうか。そんなことを疲れた夜の片隅に、どんよりと澱んだままディスプレイの青い光に照らされて重く疲れた頭が思索する。小学5年から6年にかけて、昼休みに水のみ場で友人といつも模索しつづけた、人の体は止まったあと朽ちて、塵となって風の中に四散してしまうのはわかったが、人の心はどこから来てどこに行くのか、今と言うものは何なのだろうか。今を今と感じる生き生きした命と言うものは何なのだろうかと言う、繰り返し熱っぽく語り合った思索の答えが未だに見つからない。その答えを追って行けば行くほど、身近な道具が考えられないくらい便利になっていくことに何の意味があるのかと言うところにとり着く。ただ一瞬の今を生きるためにはこんな道具はいらないのではないのか。きびしく叩かれた後で一瞬見せる、山や、野や、水辺の、はっと息が止まるような美しさとの出会いの刹那の喜び、澄んだ笑顔のぬくもり、そんな神がやどった時の一つの出会いだけでも今を生きる意味があるのではないだろうか。そんな一瞬を人は表現したくて神を創造してしまったのかも知れない。すべてのことを知ったとて何になると言うのだろうか。

そんな思索の渦巻く夜半の、遠い時のかなたからゆったりとした祭りの囃子が聞こえてくる、お神楽の笛と甲高い太鼓が響き、暗闇の中で鈴の光があめ色にゆらぐ。私は何かを忘れている。何かを置き去りにしてきてしまった。そんなことにも気づかずに、目先の新しげな幻を永久に追いかける狂気にいるのかもしれない。今ならまだ間に合うのかもしれない。

遠くからたくさん声が聞こえる。「神社でかくれんぼしよー……」今月は雨に打たれながらたくさんの方のことを考えています。追われながらふっと気づいたら出番は終わっていたなんて事にはあまりなりたくないものだから。静かに、ゆっくりと考えています。早く梅雨が終わらないかな。